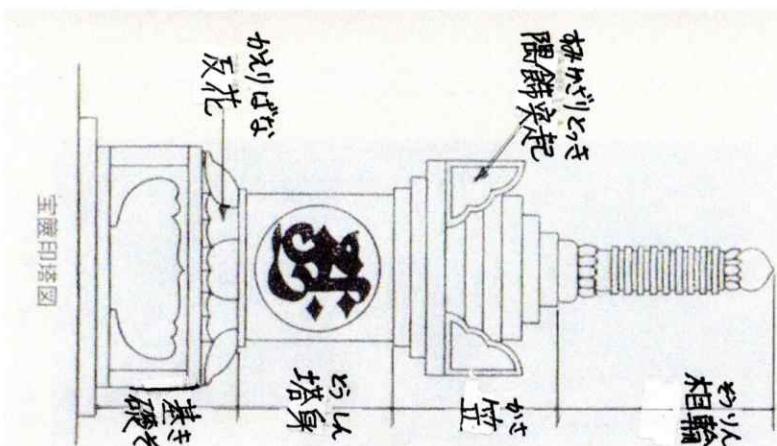


近頃、色々なところで葬儀の在り方やお墓のことなどが話題になっています。今までのようないな葬儀を行わず、火葬場の祭壇の前でお経を唱えてもらったり、「樹木葬」「散骨」など、今まで考えなかつた弔いも出てきています。私ども、檀家さんや信徒さんを預かる僧侶として「色々な形があるのでは、どれがいいとは言えません」とこのように言つていたら、おそらく今までの葬儀の形はすっかり変わつてしまふと思ひます。導いていたくお釈迦様や、教えをいたく道元禅師の教えを大事に、佛教の在り方が問われるのかもしれません。新しいお寺を建てていただけるといふのは、「少しずつ形は変わつても、仏様やお寺を他を大事に守つていきます」という宣言のような気がします。私自身、檀家さんや信徒の皆さんに変わらないのを伝えていきたいと思ひます。

〔 ੴ ਸਤਿਗੁਰ ॥ ੫੩ ॥ ੪੮ 〕



今の工事で、外の観音像が移動されることはなりましたが、その觀音様の横に四重の塔があつたのを見られた方もあると思います。今は、工事の調査でアーチトに包まれていますが、この塔を宝篋印塔と言います。この塔はもともと、『宝篋印陀羅尼經』といふお経を收める為のもので、十世紀中國で作られ、日本へは応和元年(九六一年)に伝わり、その後全國に広がりました。

『宝篋印陀羅尼經』には、「一つまみの香をこの塔の前で焚き、一本の香華(供え花)をこの塔に捧げて礼拝するだけで、自分が過去に犯してきただけた仏教的な罪が一切消え去り、必ず極楽往生が約束される」と記され、全國に塔が建立されることになりました。

宝鑑印塔《》

つたです」と言つてもらいました。曹洞宗のご析構の場合は、丁寧な場合には『大般若經』を読みます。皆さんもご存知かと思いますが、分厚い経本を扇のよう広げて、理趣分と呼ばれる大般若經の中心になる部分のお唱えをします。お経の終わりには、一人ずつの前で、その経本を広げ「般若の風」を送つて、工事の安全を祈願します。



八月の終わりから本堂の解体が始まり、続いて墓石の移転、そして忠魂碑の移転と統いて、彼岸の終わりには、すつかり更地になりました。新しい本堂や寺墓も完成の姿が目に浮かんてくるようです。九月二十七日には、地鎮式を執り行い、工事の安全をご祈祷をさせてもらいました。工事関係の方からも「お寺の住職の地鎮式に参加するのはあまりないので、ありがたか

令和二年十月号

願王寺報